

附属やまぐち学園だより

やまぐち学園教育目標：発見し、はくくみ、かたちにする学びの広場
めざす人間像：よりよい未来を共に創り出す人間

第3号 2020年7月30日(木)

山口大学教育学部附属幼稚園

〒753-0070 山口市白石三丁目1番2号 TEL 083-933-5960

山口大学教育学部附属山口小学校

〒753-0070 山口市白石三丁目1番1号 TEL 083-933-5950

山口大学教育学部附属山口中学校

〒753-0070 山口市白石一丁目9番1号 TEL 083-922-2824

研究者としての附属学校園の先生方

山口大学教育学部 副学部長 佐野 之人

皆さんこんにちは。今年度より山口地区附属学校園担当副学部長に就任しました佐野之人と申します。じつは私は平成28年4月から平成31年3月まで附属山口中学校の校長を務めておりましたので、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。「哲学」ということで何となく思い出していただける方もいらっしゃるかもしれませんね。

附属学校ってどんなことをするところだと思いますか。ほかの学校と一番違うところは教育に関する研究を行って、地域の先進的なモデルとなるというところだと思います。ではどんな研究をしているのか、少しご紹介しましょう。全般的に言えることは教職員＝研究者が常に目の前の幼児・児童・生徒に即しながら「教育とは何か」という原点の問いに帰ろうとしている、ということです。

まずどんな「人間」に育てるか、ここから考えなければなりません。やまぐち学校園では幼小中で議論を重ね、「よりよい未来を共に創り出す人間」を「めざす人間像」としました。人間像とあるのは、教育が目指すものは卒業時の姿ではなく、生涯を見据えたものだからです。生涯を見据えて「人間」を育てる、これが教育の目的です。

さてこうした「人間」を育成するためにはどんな教育プログラムを組んだらよいか、それが次に問題になります。やまぐち学園ではまず、「対象・他者・自己と向き合う子どもの姿」を視点としたカリキュラムや保育授業づくりが不可欠と考えました。「よりよい未来を共に創り出す」と言っても、現代はそれが一体どの方向にあるのかすら分からない時代ですから、「どうあるべきか」より先に「何であるか(対象・他者・自己)」に向き合わなければならないのです。「どうあるべきか」はそこから生徒が自分から見出していかねばなりません。

中学校での「研究主題」は「自己と向き合う生徒の育成～生徒の認識を変える深い学びのある授業を通して～」で、「研究仮説」は「生徒が『没頭』と『俯瞰』を行き来する授業を教師がすることは、生徒の自身の考えに対する自覚を促し、生徒の認識を変え、生徒に学びに向かう力を高めることになる」となっています。面白いなあ、と思ったので紹介してみました。何が面白いかというと、「没頭」を「純粋経験」ないし「直観」、「俯瞰」を「反省」と言い換えると、日本の哲学者「西田幾多郎」が『善の研究』(1911年)で描こうとしていたことと深くつながるからです。附属の教職員は哲学者でもありそうです。

音楽を聴くことに没頭している時は音楽を聴いているという判断は起こりません。「あ、今私は音楽を聴いている」などと判断したら、もう音楽は聴いていなくて判断していますね。この判断以前の在り方、これを西田は純粋経験とか直接経験と呼んだのです。それに比べると判断(反省)にせよ、俯瞰にせよ、これは外から見えています。これは集中の途切れたあり方ですね。しかし西田はこうした在り方も「さらに大なる統一」に進むためのものであると考えます。なるほど新境地に進むためにはどうしてもこうしたプロセスが必要となりますね。研究部ではこの「さらに大なる統一」の視点を獲得することを「認識の変容」と言い、これを「深い学び」と解釈したことになります。どうです？面白いでしょ？

しかし没頭状態でも俯瞰でも「向き合っている」とは言えません。没頭では向き合いようがありませんし、俯瞰では見るものと見られるものが分かれてしまうからです。例えば〈見られた自分〉はすでに過去の自分ですから〈見ている自分〉ではありません。こういうやり方ではいつまでたっても対象・他者・自己に出会うことはありません。こうした矛盾をどう考えたらよいのでしょうか。「向き合う」とはどういうことか、研究部の問いはさらに深まっていきます。この問いが深まれば深まるほど、現場での授業に深みが出てまいります。それはとりもなおさず「深い学び」のある、深い「人間」を育てることです。

【附属幼稚園】

新型コロナウイルス感染防止のため、様々な行事を中止したり見合わせたりしていますが、七夕の日は3密を避け、様々な工夫をすることで季節行事を行うことができました。七夕飾りは園の保育の中でつくり、短冊に願いを書くことは各家庭でいただき、それらをクラスごとに軒端に飾りました。また、園のみんなで行っていた集会は学年ごとにし、みんなの願いごとを紹介したり、保育者が演じる人形劇を見たり、七夕の歌を歌ったりして楽しみました。

子どもたちの願いごとの中には「コロナウイルスがなくなりますように。」という願いもありました。きっと願いが叶うでしょう。



【附属山口小学校】

7月10日（金）に山口市商工会議所青年部の方から、毎年行われる山口七夕ちょうちん祭りのちょうちんをお借りしました。子どもたちは日頃見ないちょうちんに興味津々。今年のちょうちん祭りは、残念ながら中止となりましたが、商工会議所の方々のおかげで、来年のちょうちん祭りを楽しみにする気持ちをもつことができました。子どもたちには、山口市の伝統、よさを感じ、ふるさとへの愛着をもつとともに、ふるさとを大切にする思いを育んでほしいと思います。



お借りしたちょうちんに、子どもたちは目を輝かせていました。



上手に間隔をあけながら、丁寧に雑巾がけをする姿に感心しました。



教育実習の事前指導。学生の皆さんの顔には緊張感と意欲の高さを感じました。

【附属山口中学校】

8月から通常より短い夏休みに入ります。7月下旬、中学校では前期末テストが終わり、9月に予定されている学園祭の準備を進めています。今年度の学園祭テーマは「彩る」です。文化部門（附中カルチャーフェスタ）はテレビ番組形式で、さまざまな企画の「番組」を披露し、体育部門（スポーツフェス in きらら浜）は阿知須のきららドームを借りて例年にはない、今年ならではの企画が催されます。それぞれの企画は、3年生が中心となって進められています。

その中で特に気にかけているのが、「3密」を避けながらの企画立案です。マスクの着用や換気、そしてソーシャルディスタンスの意識など、新しい生活様式での生活を確立することが、子どもたちの中でのもう一つの学園祭テーマになっているようです。



生徒会による、オンライン会議システムを使った学園祭テーマの発表。



企画班の打ち合わせの様子。相手との距離に気をつけています。



体育部門も、熱中症対策のため、室内で活動しています。